

# ICEモデルを通じた内部質保証の試み

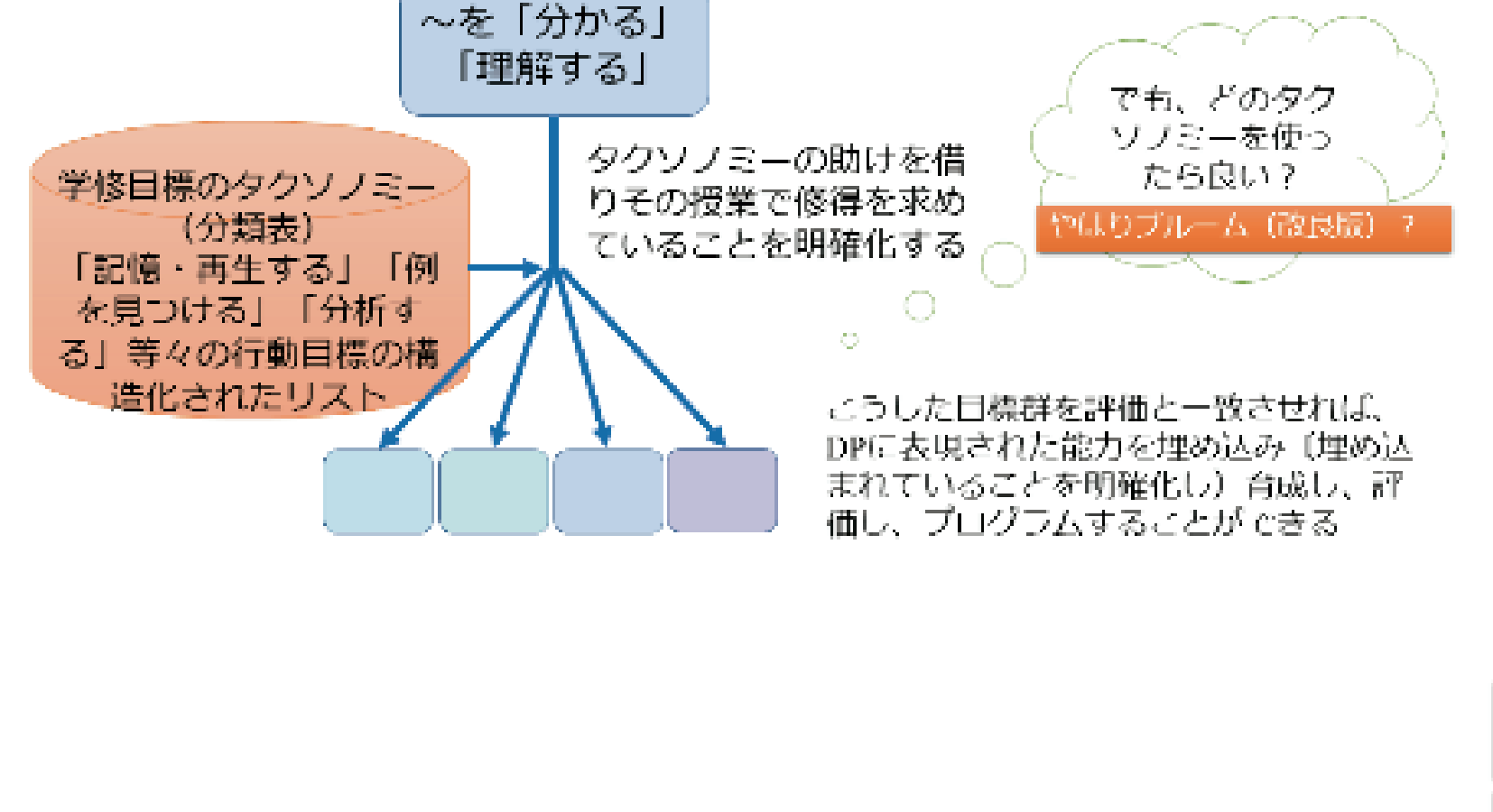
私たちは、教学マネジメントのための共通言語を持っているだろうか？

たとえば「コミュニケーション力」 ※2019年12月22日日本福祉大学でのものに若干追加・修正  
このことばを聴いて、イメージするものがずれていたら  
さまざまな人たちと、教育プログラムの目標を調整することも難しい

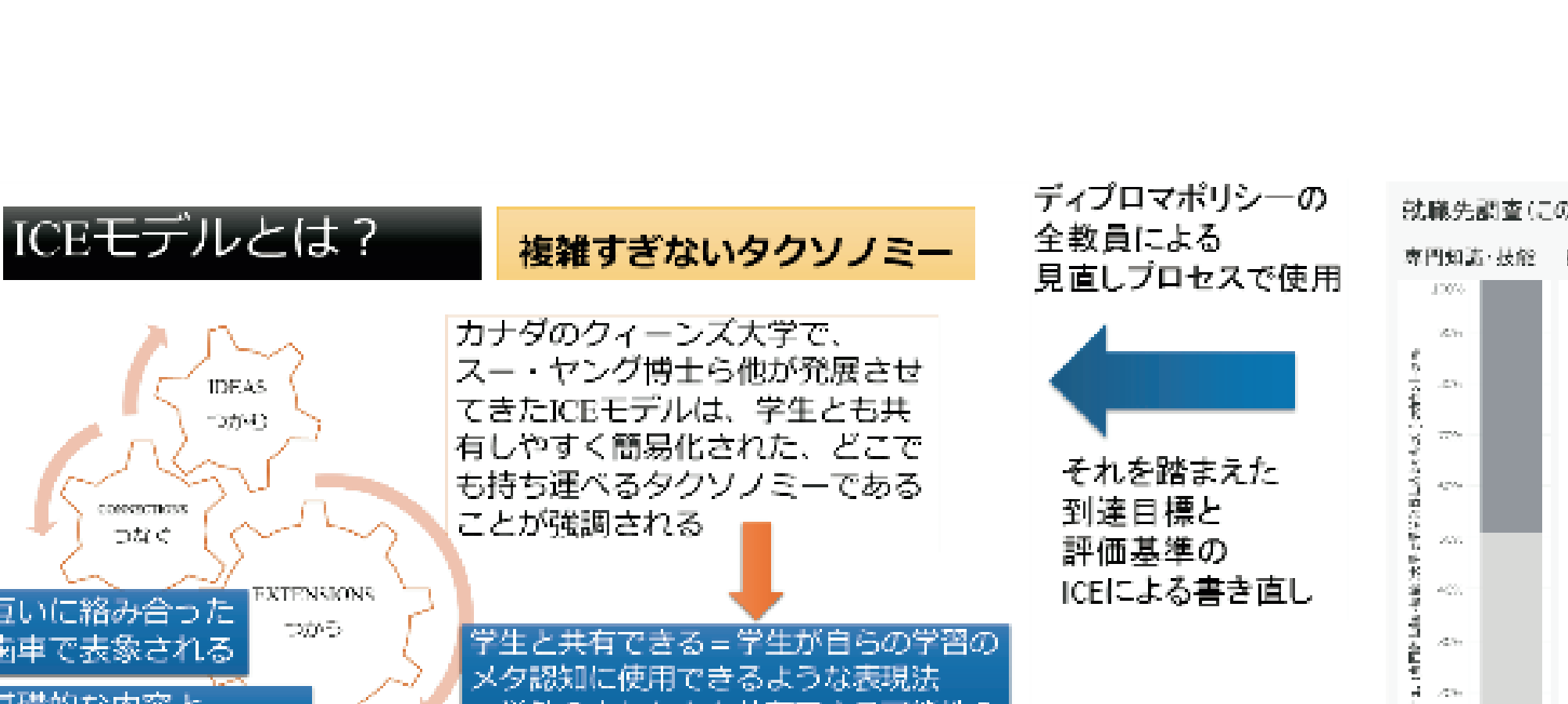
それを可能にするような言語を作りだし、大学に実装する



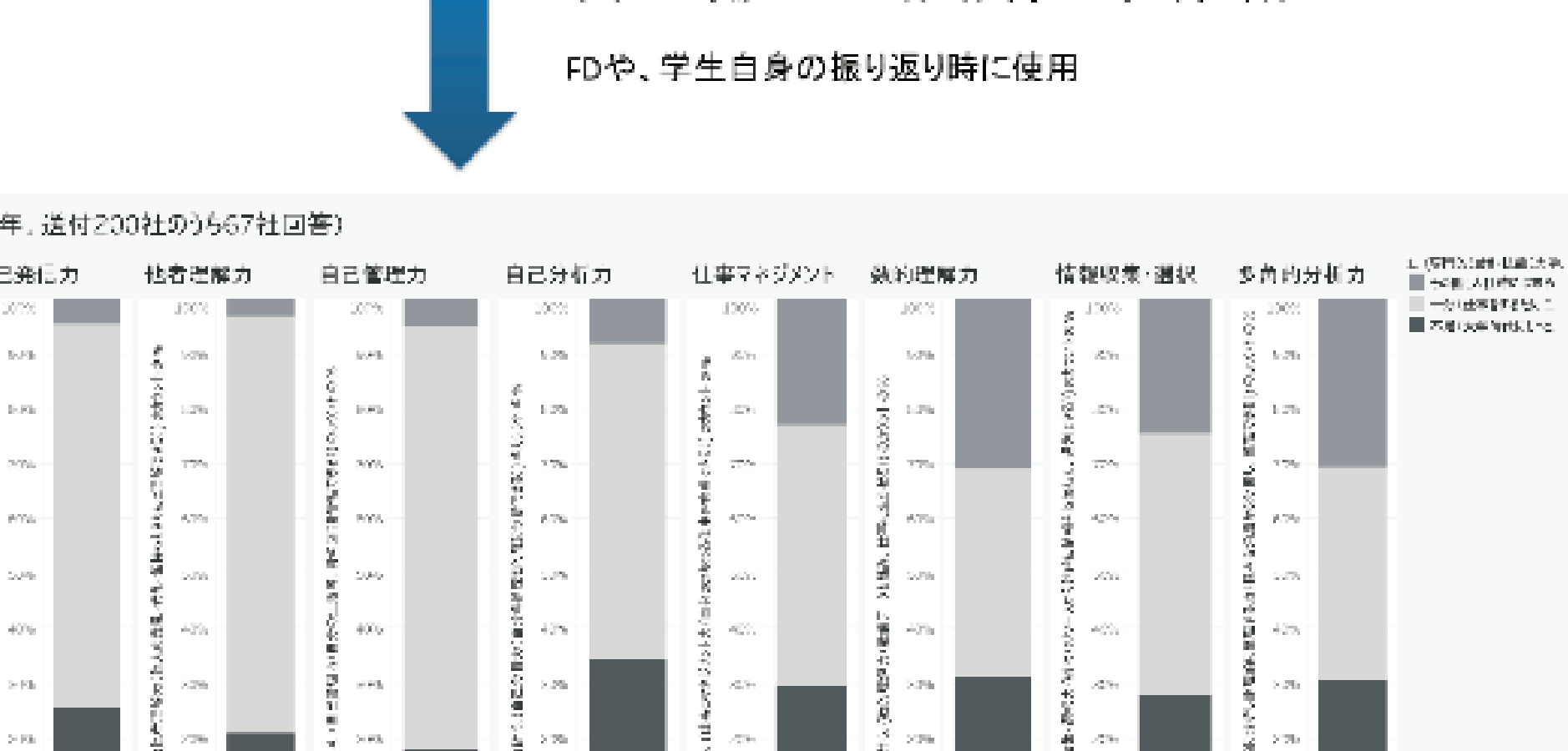
**測る**  
ICEモデルを利用する  
到達目標がうまく分解されれば、修得の目標となる能力も明確になる  
ではどのように、潜在的には多様な「分かる」を分解し、授業に埋め込むか



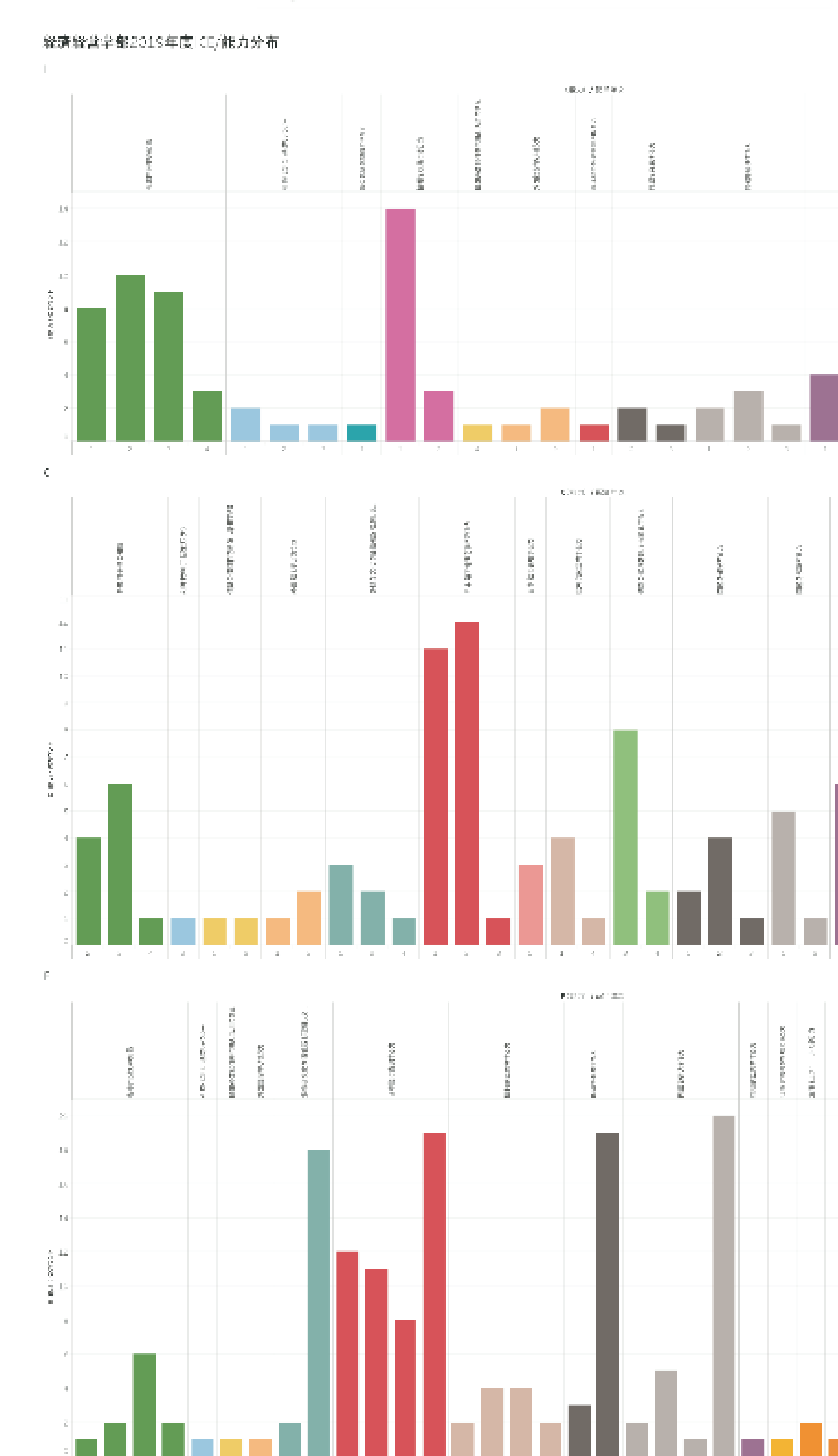
**図る**  
学修データ、外部試験データ、卒業生調査、卒業先調査等を用い3つのポリシーを見直すFD等



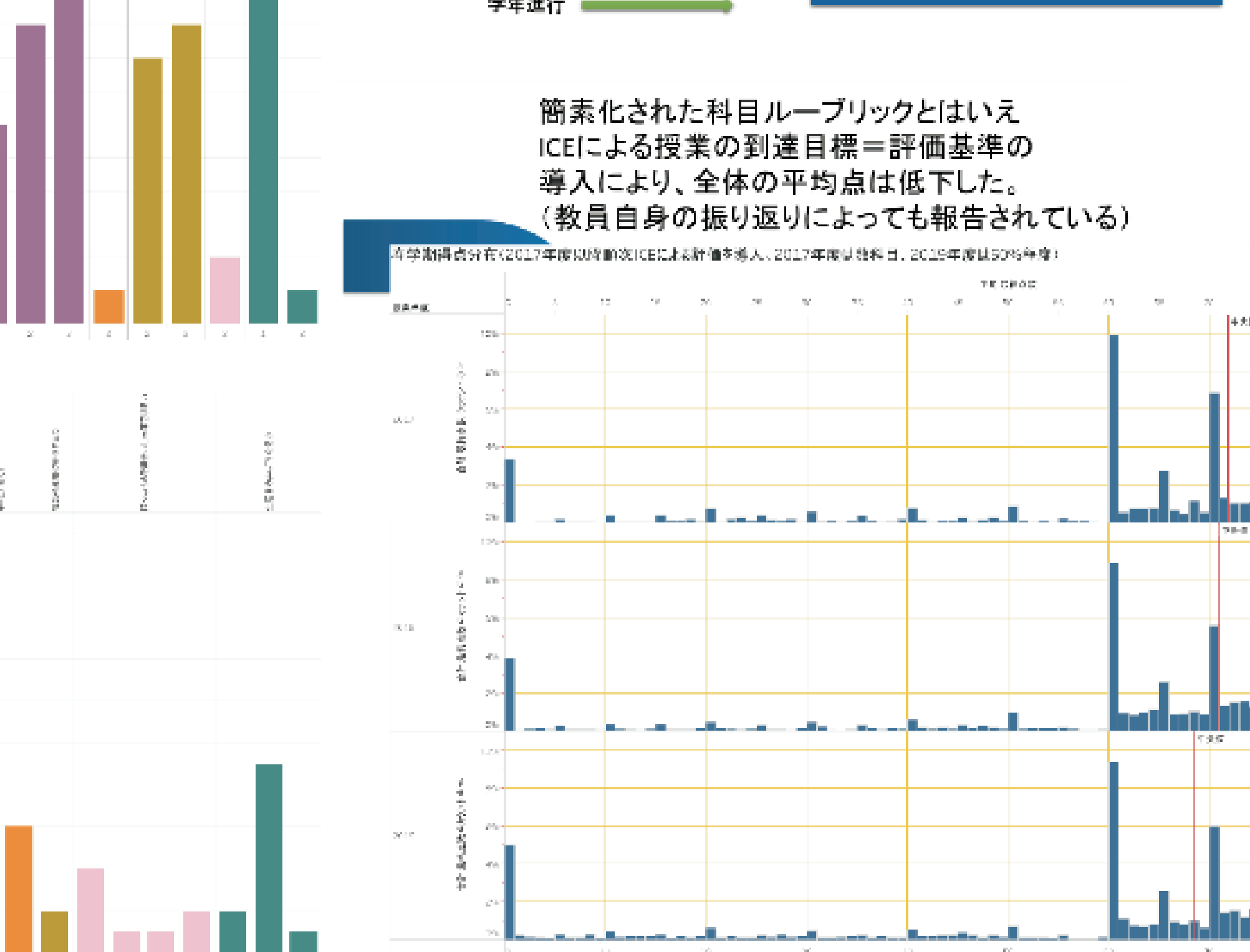
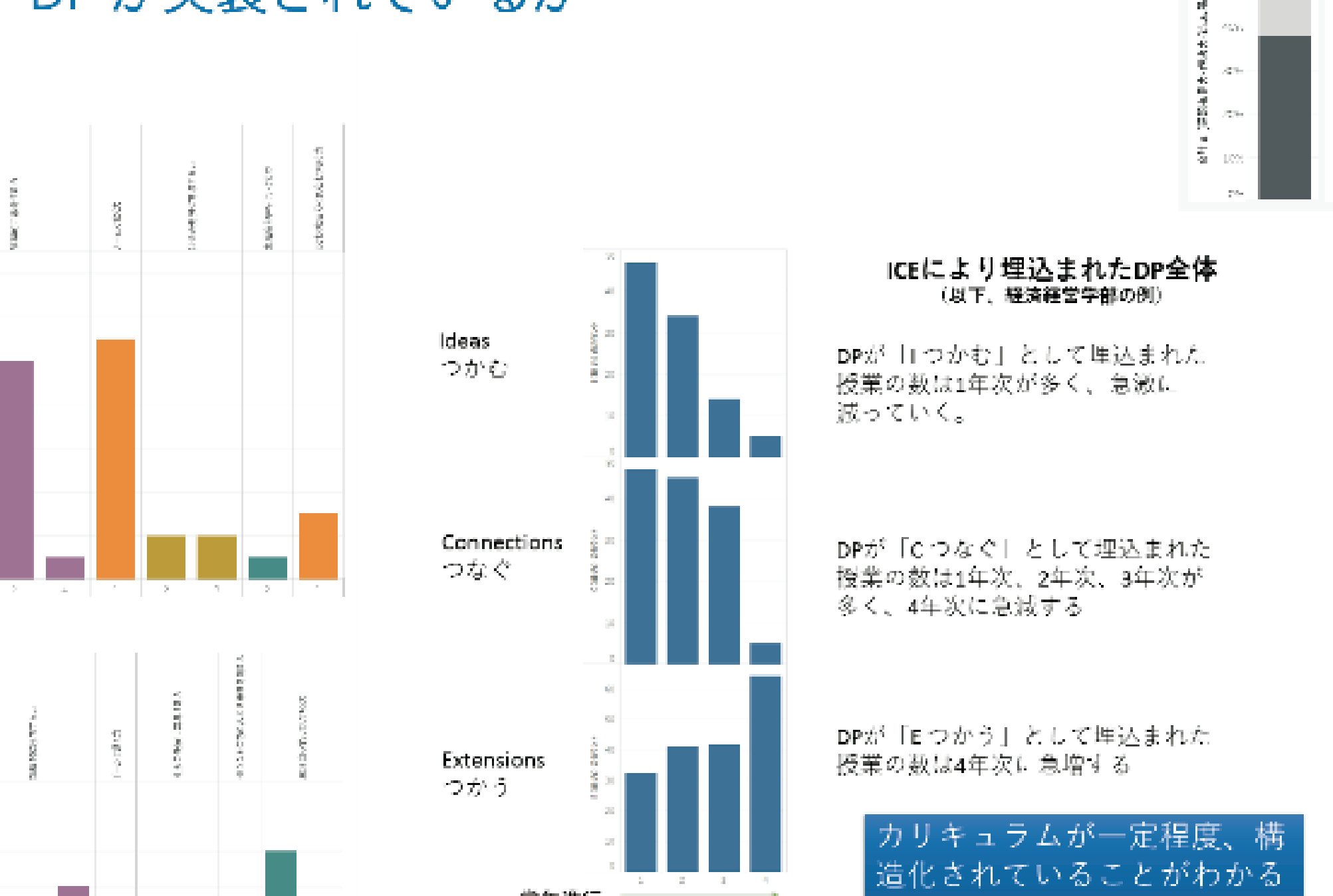
**議る**  
学生FD、卒業時調査、卒業生調査、卒業先調査、外部評価委員会等と教育の到達目標を見直す



**カリキュラムの現状を可視化する**  
2019年度の授業科目において、各学年において、どのような能力を埋め込んでいるか  
各学年において、ICEのどの段階のものとして学生が身に付ける能力を想定しているか  
各科目のマイクロレベルでの設計が集合した全体を可視化



**各授業においてどのように分散的にDPが実装されているか**



**ICEにより埋込まれたDP全体**  
(以下、経済経営学部の例)  
DPが「1つ含む」として埋込まれた授業の数は1年次が多く、急激に減っていく。  
DPが「C2つ含む」として埋込まれた授業の数は1年次、2年次、3年次が多く、4年次に急減する。  
DPが「E2つ含む」として埋込まれた授業の数は4年次に急増する。  
カリキュラムが一定程度、構造化されていることがわかる

